
テンペルス

FISH!!

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

テンペルス

【Nコード】

N1070U

【作者名】

FISH!!

【あらすじ】

主人公のアイデット・クラウザーはある人物を探して数々の世界を旅をしていた。

そして彼はある世界にたどり着いた。

それはアイデットとその人物が求めていた世界だった。

彼はこの世界にその人物がいると感じ、この旅が最後の旅になる事を信じて旅を始める……。

ブログ（前書き）

まだ『哀れな囚人くん！』が終わってないのに・・・・・・や
っちゃたぜ！

多分更新速度は一ヶ月に一度ぐらいになりますがよろしく願
いますm（――）m

プロローグ

君がいた毎日は幸せだった

何より君が居てくれたから

君が居なくなった毎日は辛かった

何より君が居なくなってしまったから

幸せだった毎日をもう一度過ごしたいと願った

それが無理でもせめてもう一度だけ会いたいと願った

だから僕は君を探す

だが君は何処にもいない

この世界の何処を探しても君が居ない

僕は気付いた

君はもうこの世界にはいないことに

だから僕は違う世界へと旅立つ

突然消えてしまった君を見つけるために・・・

そして僕は幾つかの世界の旅を繰り返す

いつ終わるか分からない旅

でも君を見つげるためなら耐えられた

君を見つけた時の喜びを考えれば

僕は数百年の時をかけてある世界にたどり着いた

その世界は君が昔読んでいた本の世界に似ていた

人間と人間ではない者達が互いを認めてあつて暮らしている世界

それは僕達が求めていた世界だった

君はここにいる

そう感じた僕はこれが最後の旅となることを信じて新たな旅を初めた
.....

プロローグ（後書き）

次は多分一週間以内に投稿出来ると思います。

では、お楽しみに〜。

キャラ設定（前書き）

題名の通りキャラ設定です。

新しい設定が出てくると設定を追加するので、初めて読む人にはネタバレの可能性が含まれます。

キャラ設定

アイデット・クラウザー

種族：テンペルス

クラス：最上位

異名：《黒き殲滅王》

【くろきせんめつおう】

性別：男

年齢：？？歳

身長：182？

体重：64？

能力属性

闇

能力名

カオス・オブ・エンド

能力説明

闇系統の力の中で最強の力。この力を応用すれば、黒い炎や、黒い雷などの技も出せる。他にも剣などの武器や防具も一時的に作る事も可能だが、あまり作る事はない。

この力は攻撃、守備のどちらとも最強クラス。

この物語の主人公。

ある人物を探して旅をしている。

普段は普通に明るい。そしてSである。

戦いでは冷静だが、自分が認めた人間が侮辱されたり、傷付けられ

たら熱くなる時がある。あと、頼まれると断れない奴。
そして可愛い女の子を苛めたり、傷つけたりする奴は絶対に許さない。

顔は百人に聞いたら全員がイケメンと言うぐらい。髪の色は黒で、髪型はとあるの一方通行さんと同じ。瞳は赤い瞳で、目付きは悪い方。体は見た目が細めだが、体つきはしっかりしている。

服装は黒のコートに黒のＴシャツ、黒のズボンに、黒の靴。
ようするに全身黒色。

武器は刀を腰に差している名刀《黒閃》

【こくせん】

だが、あまり使わない。

ストラウド・バリクス

種族：テンペルス

クラス：上位

異名：なし

性別：男

年齢：18歳

身長：176?

体重：58?

能力属性

炎

能力名

シャイニングフレイム

能力説明

上位クラスが使える炎の中では最強。しかも炎属性では最強の白い炎で、使えるのはストラウドとクリールと『八極星』の一人である

炎の使い手の最上位クラスの三人だけ。だが、ストラウドはまだ使いこなせてない為、実力は下位クラス。

アイデットが最初に出会ったこの物語の準主人公的な立場の人物。テンペルスの父のクリールと、人間の母のハルの間に産まれた。顔は百人に聞いて六割ぐらいがイケメンというぐらいである。髪の色は赤色で、髪型はFFのクラ。ドさんと同じ。瞳の色は黒色。体つきは細めに見えるが、しっかりしている。ようするにアイデットと同じ感じ。服装はFFのクラ。ドみたいな感じ。武器は持ってない。

カノン・フィード

種族：人間
クラス：なし
異名：なし
性別：女
年齢：17歳
身長：168?
体重：???
能力属性
光

能力名

エンジェルエリア

能力説明

人間が持つ力の中でも珍しい力。まだ力を上手く使えてないため、

かすり傷程度しか直せない。

アイデットが【最後の楽園】に来て、最初に助けた少女。家族は母親を早くに亡くしているので父親の一人だけ。

自分を助けてくれたアイデットに恋をしていて、会話の相手がアイデットだったら口調が変わる。その為好きなアイデットに着いていきたいと思い、アイデットと一緒に旅に出ることに。髪の色は水色で、髪型はロングで腰の辺りまである。瞳の色は黒色。

体型は細目でなかなかのスタイルをしている。

そして胸はCカップ辺り。なかなかの美少女で、百人中七十人ぐらいが振り返るぐらい。

服装はアイデットとほぼ同じ格好をしている。

ちなみに服は父親が急いで用意した。

クリール・バリクス

種族：テンペルス

クラス：上位

異名：《白炎の闘士》

【はくえいのとうし】性別：男

年齢：??歳

身長：193?

体重：87?

能力属性

炎

能力名

シャイニングフレイム

能力説明

ストラウドと同じ能力。

白い炎の使い方なら『八極星』の一人である炎の使い手を上回る。

ストラウドの父。妻のハル・バリクスを数年前に病気で失っている。アイデットの昔の仲間でアイデットとある人物との三人でよくコンビを組んでいた。

クラスは上位だが、実力は最上位クラスだった。だが、ストラウドに力を譲った為、力はあまり使えないが、それでも実力は下位クラスと上位クラスの間ぐらい。顔からなんやらの見た目が、全て魔法先生ネ。ま！のジャ。ク。ラ。ン。さすがに身長と体重は違うが、百人に聞いたら全員が「ジャ。ク。ラ。ンだ！」と言っているに似ている。あと、武器は自分の拳のみ。

ハル・バリクス

種族：人間

クラス：なし

年齢：34歳で死亡

性別：女

能力属性

なし

能力名

なし

能力説明

なし

クリールの妻であり、ストラウドの母。

数年前に病気で死んでしまった。

もしかしたら出てくるかも．．．．．？

なかなかの美人だったらしく。なぜこんな美人がクリールと？みたに思うぐらいに美人だったらしい。

紙の色は栗色で、髪は腰の辺りまで伸びていたらしい。

瞳の色も栗色だったらしい。スタイルも抜群だったらしい。

?????

通称：《アイツ》

種族：テンペルス

クラス：最上位

年齢：??歳

性別：不明

身長：不明

体重：不明

能力属性

雷

能力名

不明

能力説明

不明

アイデットが探して続けている人物。

かなり強かったらしい。
今の所では謎の人物。

キャラ設定（後書き）

感想、アドバイスを待ってます？

世界設定（前書き）

これも名前の通り、世界設定です。

キャラ設定と同じで、新しい設定が出てくると設定を追加するの
で、初めて読む人にはネタバレの可能性が含まれます。

世界設定

—世界説明—

『最後の楽園』

主人公であるアイデットが数百年の間幾つもの世界旅をしてたどり着いた世界。

この世界の人間はテンペルスに近い力を使える人間が大勢いる。なのでこの世界にやって来たテンペルス達を全く差別せずに受け入れた。

この世界は大きな三つの国が協力しあっているため、争いが無く、平和である。この世界はアイデットとある人物が望んだ世界にそっくりな為、アイデットはこの世界にその人物が居ると思い、旅をする。

この世界は機械などの文化はあまり発達していない。剣と魔法の世界みたいな世界。

—国説明—

一つの国の名前は、

南の『グレハ王国』

もう一つの国の名前は、

北の『サイレア王国』

そして最後の国の名前は、東の『アカニア共和国』

『グレハ王国』

アイデットが『最後の楽園』に来た時に一番最初に来た国。

この国は三国の中でも一番治安が良い。

理由はテンペルスの中でも八人しかいない最上位クラスの内の人と、三国ので結成された治安組織『オルバース』の本拠地があるからだと言われている。

この国の最高権力を持つ王女の名前は『セルビア・ヒイアース』と
いって、最初は争っていた三国の争いを止め、三国をまとめた今は
亡き王女、『マリンリア・ヒイアース』の娘である。

『サイレア王国』

今の所の設定は特に無し。

『アカニア共和国』

アイデットが今の目指している国。

ここにアイデットが探している人物が居る可能性がある。

――テンペルス設定――

人の姿をしているが人とは違う存在。人と違う所は寿命が人の数十
倍長い所と、特殊な力を使える所。

テンペルスか人かを判断するには基本目の色を見れば分かる。テン
ペルスは人と違う目の色をしている。逆に言えばそれぐらいしか見
た目が違う所がない。

それと、テンペルスには下位クラスと上位クラスそして最上位クラスが存在する。テンペルスが持っている特殊な能力の強さによってクラスが違う。

下位クラスは相手を少し傷つけるぐらいの強さ、上位クラスは一人を殺せるぐらいの強さ、最上位クラスが町一つを破壊できるぐらいの強さを持っている。

そしてその最上位クラスは八人しか居ない。

その最上位クラスの八人が使う力の属性は、

光、闇、炎、水、風、雷、木、土

である。

ちなみにその最上位クラスの八人は『八極星』（はつきよくせい）と呼ばれていて、その中の数人にはファンクラブが存在する。

この『八極星』の内の雷の使い手は現在行方不明である。

世界設定（後書き）

感想、アドバイスを待ってます？

第一話「出会い」（前書き）

今回は早く更新できましたが、最初に言った通りで、更新速度は一ヶ月に一度ぐらいになります。

あと、誤字などがありましたら教えてくれるとありがたいです？

では、どうぞ！

第一話「出会い」

気が付くと俺、アイデット・クラウドは見晴らしのいい平野に立っていた。

「今回は普通の所に出れたな。」

前に他の世界に入った時は噴火寸前の火山の頂上のあたりに出ていて死にかけて覚えがある。

「しかし毎回世界に入る時に意識を失うのはどうにかできんのか……。」

他の世界に入る時は何故だか絶対に意識を失ってしまう。何故なのかは俺も分からないがもう他の世界に入る事はないと思うからいいけどな。

きっとこの世界にアイツがいるはずだ。今度こそきつと……。」

と、俺が真剣に考えていると後ろの方から、

「熱い熱い燃える燃える……!!!!」

と若い男の叫び声が聞こえる。

なんだ一体？とりあえず叫び声のする方に向かった。するとそこには右腕が燃えて、もがき苦しんでいる若い男がいた。しかも右腕は白い炎で燃えていた。

「白い炎だと……。」

白い炎を使えるのは俺が知っている中では二人しかいない。だがその若い男はそのどちらでもなかった。

近くにその二人のどちらかがいるのかと思い、周りを見たが、その男の周りには誰も居なかった。

つまり、この若い男が白い炎を出した事になる。

一体何者なんだこいつは。男はなんとか白い炎を消して、

「ふう、危なかったぜ。俺に炎の耐性が無かったら右腕が塵となっていた所だぜえ。」

と一人呟いていた。

よく見ると、右腕には火傷の後が一つも無かった。

どんな炎の使い手でもあんな風に燃えたとさすがに少しは火傷をするものだ。

まあ、例外が一人はいたがな。そいつも白い炎の使い手で、炎の使い方なら右に出る者はいない程の男だった。

そいつの名前はクリール・バリクス、俺のかつての仲間の一人だ。

そういえばこいつ顔がクリールの昔の頃の顔にそっくりだな……まさかな……。すると若い男はこちらに気が付いたらしく、

「あれ、さっきの見ていましたか？ いやゝ恥ずかしいな……。まだ力を扱いきれてないんですよ俺。」

と話しかけてきた。何か馴れ馴れしく感じた俺はとりあえず一発殴っておく。

ガスッ！

「あぐわぁ！」

いいリアクションをしてくれた。こいつは殴りがいのあるやつだぞ。

「い、いきなりなんですか！」

「いや、何となく馴れ馴れしく感じたからとりあえずな……。」

「それ、よく言われます。そんなに馴れ馴れしいかな俺って……。」

あ、やべ。こいつ泣きそうだ。可哀想だからこれ以上いじめてはいけないな。

いい加減に本題に入ろう。

「まあそれはいいとして。お前、何故白い炎を使えるんだ？白い炎を使える力を持つ者は二人だけのはずだ。」

俺はそこが一番気になっていた、何故こいつがあのだ二人しか使えなかった白い炎を使えるのか。

すると若い男は半泣き状態で、

「あ、父さんが白い炎を使えるんですけど、僕何も力を持っていなかったんで、その力を受け継いだんです。そのせいで父さん全然力使えなくなりましたけどね。」

父さんだと……。いや、それよりも、

「お前見た所テンペルスだろ。なぜ力を使えなかったんだ？」

テンペルスとは人の姿をしているが人とは違う存在の事だ。まず、人と違う所は寿命が人の数十倍長い所と、特殊な力を使える所だ。テンペルスか人かを判断するには基本目の色を見れば分かる。テン

ペルスは人と違う目の色をしている。逆に言えばそれぐらいしか見た目が違う所がない。それと、テンペルスには下位クラスと上位クラスそして最上位クラスが存在する。テンペルスが持っている特殊な能力の強さによってクラスが違う。

簡単に言えば下位クラスは相手を少し傷つけるぐらいの強さで、上位クラスは人一人を殺せるぐらいの強さで、最上位クラスが町一つを破壊できるぐらいの強さを持っている。

いくら下位クラスの力が微弱だとしても力が使えない事はないはずなんだが………。すると突然こんな事を聞かれた。

「えっ、分からないんですか？あ、もしかして他の世界からきたテンペルスですか？」

何だ？この世界のテンペルスは普通は知っていないとおかしい事なのか？

「まあな……。」

「ですよね。この世界の住人だったらすぐに分かるはずですよんね。じゃあ説明してあげます。」

何かまた馴れ馴れしく感じてしまった。とりあえずもう一発……。

「ちょっと待ってくださいな、殴らないで！ごめんなさい！馴れ馴れしくってごめんなさい！どうか許してください！！」

若い男は俺が殴ろうとしているのに気が付いたらしく、土下座しながら謝ってきた。

「チッ！」

俺だってそこまで悪人じゃないし、土下座までされたら殴れないじゃないか。

「俺にさっさと教えろ。おっと、説明する前にちゃんと俺に向かって説明させていただきます我が主よと言っただぞ。」

「そ、そんな！いえなんでもないです……。」

若い男はまた半泣き状態になった。

こいつ本当にサイコーだな。俺のS心をくすぐってくるわ。

「で、では説明させていただきます我が主よ……。まずこの世界の人間はテンペルスに近い力が使えるんですけど……。」

「に、人間に俺達に近い力が使えるだと！？」

「ハイ、そうなんですよ。この世界の人間は使えるんですよ。と言っても、使える人はそんなに居ませんけどね。」

そうなのか……。でも、人間が俺達に近い力を使えるなんてな俺はいろんな世界を旅したがそんな奴を1人も見たことがない。確かに能力を使うだけの奴はいた。でも俺達、テンペルスに近い能力を使う奴はいなかった。

まあ、不老不死の吸血鬼は居ただけだな。

「なのでテンペルス達は差別される事が無くって、存在を受け入れられたんですよ。そういう事もあって交流も深まりましてですね、テンペルスと人間が結婚する様になったりしたんですよ。」

「に、人間とテンペルスが結婚だと!？」

あ、ありえない……。結婚だなんて…………。

「で、僕はテンペルスの父と人間の母の間に産まれたんです。でも僕は人間の血を濃く引き継いだんですけど、僕の母はそういう能力は使えなかったんです。なので僕は全く力が使えなかったんですよ。」

「そ、そうなのか…………。」

お、驚いたな…………。ますますこの世界は俺とアイツが望んだ世界じゃないか…………。

「あの…………ところでお名前は？」

若い男は申し訳なさそうに名前を聞いてきた。俺は仕方がないから名前を教えてやる。

「俺はアイデット・クラウザーだ。お前は？」

「僕はストラウド・バリクスと言います。て、アイデット・クラウザーって言いました!？」

ストラウド・バリクスと名乗る若い男はもの凄く驚いた様子だ。何だこいつ?というかこいつ、バリクスって言ったなやっぱリクルの…………。

「ぼ、僕貴方の話は父からよく聞きました!もの凄い人だったって

「!!」

「その父の名前は……?」

「クリール・バリクスです!」

や、やっぱりか……。

やっぱりクリールの息子だったか……。

まあ、ちょうどいい。アイツに聞きたい事もあるしな。こいつにクリールの所まで連れていってもらうか。

「急で悪いんだが、クリールの所まで連れていってくれないか? アイツに聞きたい事があるんでな。」

するとストラウドはもの凄く元気よく、

「はい! いいですよ!」

と了承してくれた。いい奴だな。でも何か鬱陶しいからとりあえず……

バコンッ!

「うぎゃあ!？」

殴っておく。ストラウドは泣きながら「と、父さんの言った通りの人だ……。」とか言っていた気がするが気にしないでおこう。

「もう、あんまり殴らないでくださいよ……。まあいいや……。じゃあ行きましょうアイデットさん!」

「ああ、じゃあ道案内よろしく頼む……………」

これが俺がこの世界…………『最後の楽園』で初めて出会った男、ストラウド・バリクスとの出会いだった…………。

第一話「出会い」（後書き）

どうでしたか？

僕は文才がないのでつまらなかつたり、内容がよく分からないという事があると思いますが、よろしくお願いしますm（――）m

あと、こんな風にしたらいいとかの意見がありましたらバンバン言ってください！

第二話「再会と旅立ち」（前書き）

なぜか最初の予定よりもの凄く早く更新出来た・・・。

何故か、『哀れな囚人くん！』よりこっちの方が書けるんだもん。

いや、サボっている訳じゃないですよ！

ちゃんと『哀れな囚人くん！』も書いてますよ！？

ただ水着が・・・。

まあそれは置いときまして、ではどうぞ！

第二話「再会と旅立ち」

あれからしばらく歩くと、小さな町に着いた。

この町の名前はハレーラと言って、この世界『最後の楽園』にある三国の内の一つであるグレハ王国の西側の方面にある町らしい。ストラウドが町に向かう途中に教えてくれた。

町にはテンペルスと人間が一緒に笑ったり、遊んだり、暮らしたりしている光景があった。

どうやらストラウドが言っていた事は本当だったらしい。やっぱりアイツはこの世界に居る可能性が高いな……。

そんな事を考えていると、ある一軒の家にたどり着いた。

「ここが僕達が暮らしている家です。父さんは多分中に居ますよ。じゃあ入りましょうか。」

「分かった……。」

俺はストラウドの後に続いて家の中に入った。すると、そこには見覚えのある男の姿があった。

「父さんただいま。」

「おう、なんだ今日は妙に早いじゃねえか。一体どうし……た……。」

その男は俺を見た瞬間、固まってしまった。

俺は固まってしまった昔の戦友である男に久しぶりの挨拶をする。

「久しぶりだなクリール。数百年ぶりか？」

するとクリールは大きな声で、

「クラウザアアアアアアアアア！！！！！」

と俺の名前を叫んだ。

とりあえずうるさいので、

ガスッ！

「がふう！？」

「うるさいぞクリール。いい加減にしないと殴るぞ？あつ、もう殴つてるな。まあ、いいか。」

「あ、相変わらずだなそういう所は．．．．。」

クリールは膝をつき、自分のお腹を押さえながらそう言った。
こいつもいい反応をしてくれる所は変わってないな。嬉しいかぎりだ。

ハッ！？いかんいかん、本題に入らなくては．．．．。

「ところでクリール。再会を楽しむ前に聞きたい事がある。」

「何だ！？今なら何だって答えてやるぜ！俺の秘密でもな！」

「いや、お前の秘密は別にどうでもいい。」

「そうか．．．．。」

クリールは何故か落ち込んでしまった。
だって別に今はお前の秘密何かどうでもいいし。
それにそんな事よりも聞きたい事がある。

「アイツの事なんだが．．．．。」

「アイツ．．．？ああつ、アイツの事が！？」

さすがクリールだな。俺がアイツと言っただけで分かってくれたらしい。

「悪いがストラウド、ちよつとの間家から出ていてくれ。俺はクラウザーと二人だけで話をするからな。」

ストラウドはクリールのこの言葉で何かを察したらしく、

「分かった、じゃあ俺は出かけてくるよ。ゆっくり話していてくれよ。」

と言ってすんなり家から出ていった。

「これでちゃんと話ができるなクラウザー。」

「そうだな。」

「で、お前はまだアイツの事を探しているのか？」

クリールは真剣な表情でそう聞いてきた。

「まあな、俺にはアイツしかいないんでな。」
なので俺も真剣に答える。

「お前はやっぱり変わってないな．．．。言っておくがこの世界に来てから一度も会ってないから俺は何も知らん。」

「そうか．．．．。」

やはり簡単にはアイツは見つからんか．．．．。まあ、こいつがアイツの事を見つけていたならすぐに教えてくれていただろうしな。

「だが、この国じゃないが東の『アカニア共和国』にある町が盗賊達に襲われた時に凄い雷の使い手が現れてその盗賊達を一瞬で倒したと聞いた。もしかしたらその雷の使い手がアイツかもしれないな。」

「なに！？本当か！？」

その情報が本当ならもしかしたらその『アカニア共和国』にアイツが居るかもしれない！

「ありがとうなクリール、早速向かう事にする。」

俺はそう言ってクリールの家を出ようとした。

だが、その行動はクリールのある言葉によって止められた。

「お前『アカニア共和国』が何処にあるか分かるのか？それに金はどうするんだよ？」

「それは．．．．。」

忘れていた．．．。

いつもは別に目指す所は特に無かったから適当にその世界の全ての場所を旅しているからそんな事は一度も考えたこともなかった．．．。

それにいつもは珍しい物を売って金にしていたが、今回は特に珍しい物なんか持ってないからこの世界の金が手に入らない．．．。

「まあ、安心しろ。俺が金をやるよ。」

「ほ、本当か!？」

俺がそう言つとクリールにもの凄い笑顔で

「ああ、ただし条件がある。」

と言つてきた。何か嫌な予感がする．．．。

「な、なんだ．．．?」

「条件はストラウドと一緒に連れて行つて欲しいんだよ。」

「ハア?」

何を言っているんだこいつは?あいつを連れていけとな?意味が分からないどうしてだ?どうしてそうなる?

「あいつは素質はあるんだよ。後、あいつに聞いたと思うが俺はあ

いつに自分の力を譲ったんだ。だがな、あいつは全然俺が譲ったあの炎を使えないんだよ。」

「だからって何故俺の旅に連れて行かないといけないんだよ？」

俺には全く理解が出来ない。あいつがあのだ炎が使えない事と俺があいつを旅に連れて行かないといけない理由がどう繋がるんだ？

「だからあいつに修行をつけて欲しいんだよ。」

「ハア？白い炎の事は専門外だぞ？まあ、炎は使えると言ったら使えるが……。第一お前がつけているんだろ？だったらお前がそのまま修行をつけてやればいいじゃないか？」

「まあ、そこは色々あるんだよ。それにあいつはお前に憧れているからその分お前がやった方がいいと思つてな。それにあいつは『アカニア共和国』への行き方を知っている。だから連れて行っても損は無いと思つがな？」

確かに……。まあ修行の件はひとまず置いてだ。ストラウドはアイツが居るかもしれない『アカニア共和国』への行き方を知つていて、しかも連れていくだけで金が貰える。悪い話じゃない。

「分かった……。だが、ストラウドが行くつていうのか？」

「大丈夫だ！お前だからな！」

意味が分からないが、本当に大丈夫なんだろうな？
帰ってきたら聞か……。。

「えっ、本当ですか！？行きます行きます行きます行きます行きます！す！！」

もの凄く頭を縦に振りながらオツケーされた。

どうやら今回の旅は一人じゃなくって二人らしいな。まあ、いいか。久しぶりにはな……………。

そしてその日はクリールの家泊まり、酒を飲み交わした。その時にクリールがどんな風に恋をしたのかをかなりしつこく聞かされた。どうやら妻であるハル・バリクスは数年前に亡くなっているらしい。久しぶりに泣きそうになった。なかなかのラブストーリーだったからな。

まあ、酒が入っていたのもあるがな。

そんな調子で朝まで思い出話をしたり、お互い何があったかを話していたら朝になってしまった。

そしてそのままストラウドを連れて旅に出ることになった。

「じゃ、ストラウドを頼むぞクラウザー。」

「分かったよ。」

「じゃ、行ってくるよ！！」

そして俺とストラウドの旅が始まった。

第二話「再会と旅立ち」（後書き）

こんな感じで本当にいいのかな？
よく分かんないや。

ではアドバイスや感想などをくれたらありがたいです。

多分明日ぐらいに設定などを投稿しますのでよろしくお願いします

m ((m

第三話「盗賊にも色々あるんだよ」(前書き)

なんか無理矢理すぎるかも知れないけどやっちやたぜ！

ではどつぞ！

第三話「盗賊にも色々あるんだよ」

ストラウドと旅を初めてから数時間たった今、俺達は平野を歩いていた。

この平野をもうしばらく歩いていると町があるらしいからとりあえず今はそこに向かっていく。

そして俺は今凄くストラウドに言いたい事がある。

「ハアハアハアハア。ま、待つてくださいよー！そろそろ休みませんか．．．．？」

こいつ本当に体力がない！まじで足手まとい！！

いや逆に俺がありすぎて、あいつが普通なのかもしれない。

だけど、あいつ一応修行していたはずだからもう少しぐらい体力があってもいいんだがな．．．．。

「ねえ．．．アイデットさん．．．？ほ、本当に休みませんか．．．．？」

「仕方がないな、じゃあ少しだけだぞ？」

本当ならまだまだ進みたいが、こいつに倒れられても困るしな。

一応こいつはアイツが居るかもしれない『アカニア共和国』に行くための案内人だからな。

「本当ですか！？やったあああ！！！」

ストラウドはそう叫ぶと

その場に寝転んでしまった。その行動にイラッとした俺は寝転んだ

ストラウドの腹を、

ドスッ！

「ふぐう！？」

ある程度力をいれて踏んでおく。だって疲れたから休みたいって言うてたくせになんか元気そうだし。

「ひ、酷い．．．．。」

ガクッ

ストラウドはそう言うと言絶してしまった。

あれ？力加減を間違えたか？まあ、大丈夫だろ。こういう奴には．．
．何だっけな？確か．．．ギャ、ギャ、ギャ？

「ギャグ補正です．．．。」

「お前気絶してたんじゃないかったのか？て言うか人の心の中を勝手に読むんじゃない！」

とりあえずまたイラッとしたので腹を、

ガスッ！ガスッ！

「ぐぼお！？」

ガクッ

ついノリでこいつを気絶させたが、こいつが起きないと先に進めない事に。

座つた時に「ぐえ!？」と言つ声か聞こえた気がしたが氣のせいだろつ。

今のこいつは椅子だ。ただの椅子だ。俺専用の椅子なんだよ。椅子が座った時に反応する訳がない。

まあ、バカな事を考えるのはとりあえず止めよう。でも暇だな・・・

・そうだ!! ボーとしておこう!

そう思った俺は早速ボーとすることにした。

[illegible]

「おい、兄ちゃん？」

	.	.	.
.	.	.	.
.	.	.	.

「おい！聞いてんのか！？俺達は．．．．。」

．．．．．
．．．．．
．．．．．
．．．．．

「テメエ聞いてねえだろ！？ふざけやがって！少しぐらい反応しやがれ！！」

ブチッ！

「さつきからギャギャうるさいんだよ！人が気持ちよくボーとしていたのに邪魔しやがって！！」

周りを見るといつの間にか変な五人に囲まれていた。こいつらマジで人が気持ちよくボーとしていたのを邪魔しやがって！たたですむと思うなよ！

「こいつ．．．．おい、やっちなえ！！」

リーダーみたいな奴がそう言うのと他の四人が襲いかかってきた。しかも素手で。もう舐めているとしか思えない。

とりあえず俺は立ち上がり、敵の攻撃から身を守るために気絶しているストラウドを．．．．

ヒヨイ

ガスッ！ガスッ！ガスッ！ガスッ！ガスッ！

「！？なっ、ちょっ、何で殴られ．．．ぐふえ！？」

盾にした。殴られたからか知らんがストラウドが目覚めた。そして俺はその場にストラウドを放置して少しだけ距離をとる。すると襲いかかってきた四人はストラウドを囲んで、

「お前でもいいわ！くそ！くそ！ふざけやがって！」

「何で俺達はそのに居る変な奴に従わないといかんだ！？」

「別に俺達盗賊したくねえし！！」

「家族さえ人質じゃなかったらな！俺だつてな！」

ガスッ！ガスッ！ガスッ！ガスッ！ガスッ！

「ちょっ、八つ当たり！？八つ当たりハヨクナイヨ！？」

ストラウドをリンチしていた。どうやらこいつらは盗賊らしいが、したくてしている訳じゃないらしい。

盗賊にも色々事情があるんだな。この歳になって教わる事になるとは思わなかった。

それにしても、

ガスッ！ガスッ！ガスッ！ガスッ！ガスッ！

「ちょっ、マジで止めて！分かった分かった！た、助けるから！家族とかも助けるますから！だからリンチはやめてええええ！！」

「ハハッ！」

ストラウドのリアクションは本当に面白いな。

最高だぜ！役立たずだと思つてすまん！ギャグ要員としては最高だわ！

て言つか見てみるよ！あのリーダーみたいな奴の顔、他の四人がこんな事を思つていた事を知つて顔色が悪くなつてゐるぜ！

「テメエ弱いくせにどうやって俺の家族を救うつて言つんだよ！」

「ザコのくせによ！」

ガスッ！ガスッ！ガスッ！ガスッ！ガスッ！ガスッ！

「いや、助けるのは・・・痛い痛い！俺じゃなくつてその人だから！」

「ハア？」

何言つてんだこいつ？何で俺が助けなきゃならねんだよ？

「何言つてんだ！？あいつが何者かは知らねえがな！あそこのトッブはな、雷を使う上位クラスのテンペルスなんだぜ！しかもかなりの使い手だ！勝てる訳がねえ！」

ガスッ！ガスッ！ガスッ！ガスッ！ガスッ！ガスッ！

てかあいつなかなかタフだな。あれだけ殴られてもまだ気絶しないなんてな。

ただのザコだと思つていたけど、ただ俺が強すぎるだけか（笑）

「痛い痛い痛い痛い！き、聞いて驚くなよ！あの人はな、《黒き殲滅王》と呼ばれたアイデット・クラウザーさんだぞお！！」

それを聞いた瞬間、四人の動きが止まった。

そしてこっちを見て、

「な、何だって．．．？あの闇の使い手の最上位クラスのテンペルスの．．．．？」

「こ、こいつが《黒き殲滅王》だと．．．．？」

「よ、よく見てみる！あいつ赤い瞳に、黒髪で、黒のコートを着ていて全身黒ずくめで、腰に刀を差しているぜ！い、言い伝えと一緒にだ！」

「あ、あの生きた伝説のアイデット・クラウザーだつて言うのか．．．．」

止めるおおお！恥ずかしいから止めるおおお！！その《黒き殲滅王》つてのも、生きた伝説とかいうのも止めてくれええ！！
て言うかりーダーみたいな奴完全に空気だな．．．。
てかいつの間にか四人が俺に向かって土下座していた。
そして、

「お、お願いだ！助けてくれ！！」

「俺達の家族を助けてくれ！！」

俺に助けを求めてきた。

や、止める！俺は助けてくれと言われたら断れないんだよ！

仕方がない・・・助けるか・・・。

「分かった、引き受けよう。安心しろ。お前達の家族は俺が必ず助けてやる。」

「ほ、本当か!?!」

「か、感謝する!!!」

たくつ、俺もまだまだ甘いな・・・。

俺はとりあえずフラフラしているストラウドを、

ヒューン!

「えっ、ちよつ、あぎゃ!?!」

「ぐえ!?!」

ちよつと力をいれてリーダーみたいな奴の方にぶん投げて激突させた。こんなめんどくさい事になったのはこいつのせいだからな。もう少しぐらい痛い思いをしてもらわないとな。

「じゃ、早速そのトップとやらが居る場所に案内して貰おうか?」

「は、はい!」

そして俺は気絶したストラウドとリーダーみたいな奴を引きずりながら、そのトップがいる場所に向かった。
もの凄くめんどくさいがな・・・。

第三話「盗賊にも色々あるんだよ」(後書き)

あと、キャラ設定を追加しました！

よかつたら見てください！

あと、感想とアドバイスをお待ちしています！

第四話「一体誰が!？」（前書き）

まあ、相変わらずの下手くそな文章です。

そんなのですが、見てくれたら嬉しいです。

では、どうぞ!!

第四話「一体誰が!？」

あれから数時間。俺達はそのトップがいるという建物にたどり着いた。

だが、俺は本当にここが盗賊のアジトなのか?と疑いたくなった。

「ここにそのトップがいるのか？」

「ハイ！」

「いや、あの．．．本当にこの建物の中に盗賊のトップがいるのか．．．．．？」

「そうだ!あいつはここにいる！」

「いや、でも．．．．．ここ．．．．．」

なんか表札らしき物があるんですけど?しかも【俺様のアジト】って書いてあるんだが．．．．．。

ここは本当に盗賊のアジトなのだろうか?

まあ、こいつらが言っているから本当なんだろうけど．．．．．さすがにこれはないな．．．．．。建物は廃墟みたいな感じでまさに盗賊みたいな悪い奴等が居そうな雰囲気なんだが、【俺様のアジト】っていう表札みたいなやつがあるだけでその雰囲気がぶち壊しだよ!

あつ、ちなみにストラウドとリーダーみたいな奴はまだ気絶しているので俺が引きずっているよ。

「まあ、いつか。とりあえず……………」

俺は扉に近づきそれを、

バンッ！

蹴り破った。

すると中には見た目がまさに盗賊な奴等が七十人ぐらいと、そんな奴等を軽く睨んでいる奴等が二十人ぐらい居た。

合計で百人ぐらい居るな。多分睨んでいる奴等は俺の後ろに居る奴等と一緒に、家族が人質にされている奴等だろうな。そして扉が蹴り破られた事に気がついた盗賊達は一斉に扉の方を向き、俺の存在に気がつく。ちなみにまだ気絶している二人は俺が引きずっていて、あの四人は俺の真後ろに居る。

「なんだお前は!？」

「ただの通り……………」

「聞いて驚くなよ!この人は【黒き殲滅王】と呼ばれたあのアイデット・クラウザーさんだ!!」

俺がかつこよく「ただの通りすぎりさ!」と言おうと思ったのに、いつの間にか目を覚ましたストラウドが恥ずかしい俺の異名を叫ぶ。すると盗賊達は、

「あ、あの【黒き殲滅王】だと……………た、確かにあの話で言っていた見た目とまったく一緒だ!」

「バ、バカな!?生きた伝説のアイデット・クラウザーだと!？」

「い、今は行方不明だったんじゃない?」

「あの伝説が本当なら、勝てる訳がねえ！ど、どうする！？」

とか言いながら騒ぎだした。

だから止めるおおおお！その名で呼ぶんじゃないやなあああい！！恥ずかしいだろうがああああ！！何で皆してその名で呼ぶ！？なんで俺生きた伝説とか言われてるの！？誰か教えて！？なんで俺は生きた伝説とか言われているの！？なんであのいかにも厨二病な異名の【黒き殲滅王】を皆知っているのoooo！？

ギリギリッ！

「あの、アイデットさん凄く痛いんですけど．．．．？そんなに強く肩を掴まないでくださ．．．痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い！」

意味が分からない！分からない分からない分からない分からない分からない分からない分からない分からない分からない分からない分からない分からない分からない分からない！

ギリギリギリギリギリギリギリギリッ！

「痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い！．．．あつ、やつと離してくれた！けど痛い痛い痛い痛い！．．．」

バタッ！

はっ！？何故か横でストラウドが右肩を押さえながらうずくまっている！！

「一体誰だ！？誰がこいつをやったんだ！？」

するとその場にいた全員が、

「いや、あんただろ！？」

とツツコミをいれてきた！

「そうなのか！？俺がストラウドをやったのか！？」

ゲシゲシゲシゲシッ！

「あ、アイデットさん……………今も蹴ってますうううう！
」

ゲシゲシゲシゲシッ！

はっ、ストラウドが誰かに蹴られて痛がっている！？

「お前らあああ！許さんぞおおお！！」

「いや、だからあんただろおおお！！」

そして俺は奴等を殲滅する。ストラウドをやったこいつらを。もちろん無理矢理盗賊させられている奴等以外を。（あれ？なんかあいつら俺がストラウドをやった犯人だって言っているけど気のせいだな！）

そして俺がこの世界に來てからの初めての殲滅（戦闘）が始まった．
．
．
．
．
．
．
．

第四話「一体誰が!？」（後書き）

次は戦闘に入ります。

でも自分は戦闘描写などを書いたことは一度もありません。
でも頑張って書きます!

でもさほど期待しないで待っていてください。

感想、アドバイスをお待ちしております!

第五話「クスは駆除だ！」（前書き）

戦闘描写を書いてみました。

でもやっぱり上手く書けてないと思います？

ではどうぞ！

第五話「クスは駆除だ！」

「お前ら覚悟しろよお？」

「俺達何もしてねえのに何で覚悟しなきゃいけないの！？ちょ、話せば分かる！！」

盗賊がそんな事を叫ぶが、そんな言葉は無視だ。
俺は手から闇の力を凝縮させた塊を作り出し、

「カオスシュート！！」

盗賊の方に向かって投げた。ちなみに技名は今思いついたやつだ！
そして塊は盗賊の一人に当たると同時に、

ポカーン！！

「ギャアアアア！？」

周りにいた盗賊達を巻き込んで爆発した。

今でほとんどの奴等を気絶させたな。あつ、勿論無理矢理盗賊を
さられている奴等以外がな。

俺は優しいので盗賊達は生かしてはおく、そこら辺の治安を守る組織的な奴等に引き渡す為にな。特に引き渡さなければならぬ理由はないが、しいて言うならば何となくだな。でも……………

「……………やりすぎたか？」

久しぶりに闇の力を人に使ったから力加減を間違えたかもしれない。

皆気絶しているんじゃないかって死んでいそうな感じなんだが．．．
特に直撃した奴が。

盗賊達は皆服がボロボロで、それほどの量ではないが血を流している。

「まあ、いつか。こういう奴等はなかなか死なない風に来ているからな。」

俺が笑いながら後ろを向くとストラウドと四人は、
ポカーンとしていた。

なんだ？何でポカーンとしているんだ？そんな顔をされるとイタズラしたくなるじゃないか。

「こ、これがアイデットさんの力なんだ．．．。」

「さすが【黒き殲滅王】。こんな奴等なんか相手じゃないってことか．．．。」

「やはり伝説の通りだ．．．。」

我慢だあ！我慢するんだあああ！！恥ずかしくて泣きそうになるのを我慢するんだあああ！！！！！！

そんな感じで我慢をしていると、

「【雷光】！！」

と言う声と同時に後ろから雷の攻撃が飛んできた。

俺はとつさに闇の力で盾を作り出し、雷の攻撃を防ぐ。

まあ、別にこの程度の攻撃は簡単に回避できたし、直撃しても平気

なんだが、俺が盾を作り出して攻撃を防がなかったらストラウド達に当たっていたからな。

「へえ、あんた【雷光】を防ぐなんてやるねえ。」

俺が声のする方を向くと、攻撃を防いだ事を意外そうに思っているような顔をした男が立っていた。

おそらくこいつが盗賊のトップなのだろう。

「あの程度の攻撃、防げない筈がないだろ？」

俺は男を見ながらそう言った。

よく見ると男の横には服が破かれてボロボロな少女がいた。

そんな少女に気がついた四人の中の一人が、

「カノンー!!」

と叫んだ。多分あの少女はこいつの娘か何かなのだろう。

「全く今からお楽しみだったのにお前が来るから出来なかったじゃねえか。まあ、お前をさっさとブツ殺して続きをさせてもらうがな！」

男はそう言いながら少女を蹴り飛ばした。

その行動に俺はブツンときてしまった。

俺はこういう奴が一番嫌いだ。こういう奴は生き物中でも最低の部類だと思う。こいつはゴミだ。生きている価値の無いゴミだ。

こいつだけは生かしては置けないと思う。

「よし、お前だけは殺してやるよ。」

俺は怒りを込めて男にそっくり放った。

「はっ、やってみろよ！死ねええ！最大威力の【雷光】！！」

男はそう言つと俺に向かつて、さっきより見るからに威力の高い【雷光】とやらを放ってきた。

これが普通の奴に直撃したなら簡単に死んでしまつたろう。だが、普通の奴ならだ。

ドカーンッ！！

そして大きな砂煙が舞う。男はその砂煙が舞っている場所を見て笑いながら叫んだ。

「ハハハハッ！死んだな！！偉そうな事を言っていたのにだせえな！！」

「バカだなお前。」

ストラウドは男に向かってそう言った。

「なにい？てかあいつ以外にいたのかよ？」

「．．．あの人がお前みたいな奴にやられる訳ないだろ？」

ストラウドは自信満々でそう言い放った。

「なんだとお！？お前、今ので奴が生きているとでも言いたいのか！？」

「ああ、なんたつてあの人は……………」

ストラウドは砂煙が舞っている方を向いた。
そしてこう言った。

「【黒き殲滅王】だからな。」

ストラウドがそう言ったとのほぼ同時に砂煙の中から一人の男が出てきた。

その男は勿論、

「この程度かクズ野郎？」

アイデットだった。

——カノン視点——

「へへへへっ！感謝しろよ？俺様に抱かれるんだからな！」

目の前の男はそう言って私の着ている服の一部を破り裂いた。

私は諦めていた。私はこのまま目の前の男に汚されてしまうのだと。誰も助けには来ないんだと。

いや、実際には諦めきれていなかった。

でもどうする事も出来ない。本当は嫌で嫌で仕方がないけど、どうする事も出来ない。

だから私は願った。

『誰か助けて．．．』』

すると下の方から、

ボカーン！！

と、もの凄く大きな爆発音が聞こえてきた。

すると男は確かめる為に下へ向かう。

髪の毛を掴んで、私も一緒に連れていく。私を逃がさない為だろう。

最初私は、オルバースが助けに来てくれたのかと思った。

だけどそこに居たのは全身黒ずくめの人と、うずくまっている変な人と、父さんと他の三人だった。

あと、下に居たはずの盗賊達は皆倒れていた。

一体何者なのだろうか？

多分あの全身黒ずくめの人が盗賊達をやったのだろう。じゃ、さっきの爆発音は彼が？

私がそう考えていると男は黒ずくめの人達に向かって雷を放った。

「【雷光】！！」

だが黒ずくめの人はいとも簡単に男の雷を防いだ。私も男も驚いた。いくら男が本気で放ってなかったと言ってもあんなに簡単に防げるものではなかったからだ。

「へえ、あんた【雷光】を防ぐなんてやるねえ。」

「あの程度の攻撃、防げない筈がないだろ？」

そして黒ずくめの人私の存在に気がついた。

お父さんも私の存在に気がついた。

「カノン！！」

お父さんがそう叫ぶ。

私は返事をしたいが、そんな体力も気力も今は無い。

「全く今からお楽しみだったのにお前が来るから出来なかったじゃねえか。まあ、お前をさっさとブツ殺して続きをさせてもらうがな！」

男はそう言いながら私を蹴り飛ばした。

すると黒ずくめの人の表情が怒った表情に変わった。

「よし、お前だけは殺してやるよ。」

「はっ、やってみろよ！死ねええ！最大威力の【雷光】！！」

男はさっきと桁違いの威力で雷を放った。

ドカーンッ！！

「ハハハハッ！死んだな！！偉そうな事を言っていたのにだせえな！！」

私は彼はやられてしまったと思った。

ただどさっきまでうずくまっていた変な人が、

「バカだなお前。」

男に向かってそう言った。

「なにい？てかあいつ以外にいたのかよ？」

「．．．あの人がお前みたいな奴にやられる訳ないだろ？」

彼は自信満々でそう言い放った。

「なんだとお！？お前、今で奴が生きているとでも言いたいのか
！？」

「ああ、なんたつてあの人は．．．．．。」

彼は砂煙が舞っている方を向いた。

私もそつちを向いた。

そして彼はこう言った。

「【黒き殲滅王】だからな。」

彼がそう言ったとのほぼ同時に砂煙の中から一人の男が出てきた。
その男は、

「この程度かクス野郎？」

あの黒ずくめの人だった。

——アイデット視点——

「この程度かクス野郎？」

俺は奴に向かって言い放った。

すると奴はかなり驚いた表情になった。

それはそうだろう。自分の最大威力の技を食らったはずなのに無傷でいるのだから。そして俺は右手に闇の力を集める。

「なかなかの威力だったが、俺には効かん。」

「ヒイ!？」

「貴様は一撃で殺してやる……お前の大好きな雷でな……」

そしてそれを、

「ただし、闇の雷だがなあああ!!【黒雷】!!」

闇の雷にして男に向かって放った。

そして男は俺の【黒雷】をまともに受け、

「ギヤアアアアアアアアアアアア!!!!」

一瞬で消し炭となった。

「ふん、クスが……」

俺はそう呟くと少女の元へ向かった。

第五話「クズは駆除だ！」（後書き）

間違いの指摘、感想、アドバイスお待ちしております！！

では次回もお楽しみに？

第六話「これは一体!？」（前書き）

自分には上手く小説を書けないなあ〜と改めて自覚しました・・・

ではどうぞ!!

第六話「これは一体!？」

——カノン視点——

「ふん、クズが．．．．。」

黒ずくめの人はそう言うところらに向かって歩いてきた。

私には信じられなかった。あの男はテンペルスの上位クラス。そしてかなりの使い手だった。

そんな男の全力の一撃を受けながらも無傷で平然と立っていて、あの男をたった一撃で殺したのだから。

そして黒ずくめの人は私の目の前まで来て私の肩に自分の着ていたコート掛けた。

私の服は破かれていてほとんど服としての機能を果たしていないからその代わりとしてかけてくれたのだろう。

そして黒ずくめの人は、

「大丈夫か？もう安心だ．．．。」

優しくそう言いながら私を抱き締めた。

私は思わず泣いてしまった。まさか助かるなんて思っていなかったから嬉しくって泣いてしまった。

「辛かっただろう．．．。いくらでも俺の胸の中で泣くといい。」

私は思いきり泣いた。

私を助けてくれた黒ずくめの人の胸の中で．．．．．
．．．．．。

——アイデット視点——

俺はカノンと呼ばれていた少女の所に歩み寄り、自分の着ていたコートをかけてあげた。カノンの服は破かれていたので、ほとんど服としての機能を果たしていなかったからだ。さすがにこの格好では可哀想だからな。そして俺は、

「大丈夫か？もう安心だ……。」

そう言っただけカノンを抱き締めた。するとカノンは泣いてしまった。

多分助かった事が嬉しくって泣いてしまったのだろうな。

「辛かっただろう……。いくらでも俺の胸の中で泣くといい。」

俺がそう言っただけカノンは思いきり泣き出した。

俺はそんなカノンが泣き止むまで優しく抱いてやった。

そんな俺を見ていたストラウドは、

「さすがアイデットさんだ……。」

と言いつつ俺を尊敬の眼差しで見ている。

別に男にそんな目で見られても嬉しくないわ！

しばらくするとカノンは泣き止んだ。

そしてそれとほぼ同時にカノンは寝てしまった。

まあ、疲れていたんだろうな。起こさないでやろう。そう思った俺

はカノンをお姫様抱っこして、運んでやる事にした。

そしてよく見ると、目の前には大勢の人間が立っていた。

多分捕まっていた人達で、あの四人に助け出されたんだろう。

するとあの四人の一人のカノンの父親が、

「おかげで皆が助かりました！本当に感謝します！！何かお礼をさせて下さい！！」

と言ってきた。別に特別なお礼なんかいらんだかな……。多分断つてもしつこく言ってくるだろうし、どうせだからありがたく受け取っておくか。

「じゃあ今日の夜、家に泊めてくれないか？」

これが今の俺が欲しいものだな。

まあ宿に泊まれるぐらいの金は余裕であるが、宿が一杯で泊まれなかったら嫌だしな。

俺のこの言葉を聞いたカノンの父親は驚いた顔で、

「たったそれだけで良いのですか……？」

そう言ってきた。まあ、普通はそう思ってしまうだろうな。

「俺は別にお礼目当てで助けた訳じゃない。だから本当はいらないんだが、多分それじゃあんた達は納得しないだろう？だから何がいいか考えた結果がこれだった。だからこれでいい。」

俺がそう言つと更に驚いた顔になった。
そしてカノンの父親はこう呟いた。

「やはり伝説通りの人だ．．．．．」

本当なら今すぐにその伝説とやらを聞き出したいが、止めておこう。今度ストラウドをいじりながら聞くことにしよう。

「悪いがここに居る誰でもいいからこら辺の治安組織にコイツらを捕まえてくれるように言ってくれないか？親玉は殺したが、そこから辺の奴等は生きているからな。」

「分かりました。私達の方から『オルバース』の人達に言っておきましょう。」

「悪いな、助かるよ。」

「では、行きましょう。」

こうして俺は寝ているカノンをお姫様抱っこしたまま、助けた人達と一緒に歩いて町へ向かった。

そしてたどり着いた町は最初、俺達が目指していた町だった。少し遠回りになったが、目的地にたどり着けたのと、今日の夜はカノンの父親の所へ泊まらせてもらう事になったから宿代も使わなくて済む事と、何よりも助けた人達の嬉しそうな顔を見れたからよししよう。

そして俺とストラウドはカノンの父親に家まで案内してもらい、家の前にたどり着いた。

その時ようやくカノンが目を覚ました。

カノンは最初は寝ぼけていてよく今の自分の状態を理解していなかったが、俺がカノンの顔を見つめながら、

「よく眠っていたな。やはりお姫様抱っこをしていたからか？」

と言うとカノンは今の自分の状態を理解出来たらしく、

「えっ？ええええ！？」

一瞬で顔が真っ赤になってしまった。

「あ、あの！大丈夫ですからお、降ろしてくださいー！！」

カノンはそう言いながら軽くジタバタしだした。

お姫様抱っこなんかでこんなに恥ずかしがるなんて可愛いなあ。

俺はそんな事を思いながらカノンを降ろしてやる。

「うううう。」

なんだこの可愛いのは？抱き締めてなでなでしてやりたくなるぞ・・・。

おっと、危ない危ない。後もう少しで実行してしまう所だった。

「じゃ、中に入りましょうか？」

「あつ、はい！お邪魔しまゝすー！！」

ストラウドよ、お前は何故そんなに生き生きしているんだ？俺に教えてくれよ？とりあえず俺も中に入る事にした。

家の中はなかなか広かった。そしてカノンの父親は俺達を部屋に案内してくれた。

「ここを使ってください。後、夕食を用意しますので出来るまでゆつくりして下さい。」

「何から何まですまないな、感謝する……………」
「ありがとうございます!!」

。だから何でお前は生き生きしているんだ？訳が分からん……………
カノンの父親はそう言っただけで何処かへ行ってしまった。さて、お言葉に甘えてゆつくりするか……………
俺はベットに横になった。そして少し寝ようかと思い目を閉じるが……………

「おおおお!!」

ストラウドがうるさくて寝れそうにない。
俺はベットから立ち上がりストラウドを、

ガスッ!

「ふぐう!?!」

殴って黙らせておく。これではらくは安心だ。
そんな事を思った矢先、部屋の外の方から、

「ちょ、それは入れないぞカノン!?!」

「えっ!?!ど、どうしょ!?!」

「あつ、待ちなさい!それだけは入れては!」

「あゝ！？」

と危険そうな会話が聞こえてくる。

今日の夕食はまともな物が食べれるのか．．．？

そしてしばらくして部屋の扉がノックされた。

コンコンッ！

「はい．．．．。」

「あ、あの！夕食が出来ましたので．．．。」

来たか．．．．一体どんな凶器（料理）が出てくるんだ！？さ、さすがにこの俺でも怖いぜえ！

俺は気絶しているストラウドを叩き起こし、カノンに連れられてリビングへ向かった。

そこで俺とストラウドが見たものは、

「な、なんだこれは．．．．．？」

「これは一体．．．？」

テーブルの上に並べてある謎の生命体？（いや、食べ物なんだろうけどウニヨウニヨしているし生命体にしか見えない）だった。

カノンの父親の顔を見てももの凄く申し訳なさそうにしていた。

「すみませんアイデットさん。カノンが自分が料理を作るって聞かなくて．．．．．。」

こ、こんな料理？をどうやったら作れるんだ！？

どんな料理が下手な人間もこんな料理？は作れないぞ！？

「あ、あの！見た目は悪いですけど味は大丈夫です！！（多分．．．
。）ボソツ」

今多分って小さく呟いていたよな！？絶対に大丈夫じゃないよな！？
だがせっかく作ってくれたんだから食べないと失礼だよな。
よし、ここは勇気を振り絞って．．．．．

「よし、ストラウド！お前先に食べるよ！！」

ストラウドに食べてもらう事にしよう。

「ちょ、アイデットさん！？」

「なんだ？せっかく可愛い女の子が作ってくれた料理？なのに食べ
ないって言うのか？」

「うっ、それは．．．．．」

ふっふっふっ、貴様が女の子の手料理を食べた事が無いことぐらい
サーチ済みなんだよ！

「か、可愛い．．．．．？私が可愛い．．．．．？」

とりあえずカノンは何処か遠くへ旅立ってしまったのでほっといて
おこっ。

「あゝあ、こんな機会はもう無いかもしれないのになあゝ。ストラウドは一生女の子の手料理を食べられずに死ぬのかあゝ。」

「く．．．．．くそおおおおおおお！！！！い、いた
だきまーす！！！！」

ガツガツガツガツガツガツガツガツ！！

ストラウド、今お前は最高に輝いているぜ！！

「ウツ！？」

何だ？なんか様子がおかしいぞ．．．？顔の色が青くになったり、紫になったりしているぞ？

するとストラウドは突然席を立ち上がり叫びだした。

「グビヤヤヤ！？ア ゑし ツ ●ガ！！」

バタンツ！

ストラウドの精神力と色々な物は0になった！ストラウドは戦闘不能になって倒れてしまった！！

「．．．．．」
「．．．．．」

俺とカノンの父親、略してカノ親も固まってしまった。目の前に料理？を食べて精神が崩壊して死んだ？奴が居るからだ。
そして俺達二人は同じ考えにたどり着いた。

「．．．．．処理しよう。」

「．．．．．処理しよう。」

そして俺達二人は料理？をすぐに処理した。処理する時に料理？が「ギャオオオオ！」とか叫んでいた気がしたが多分気のせいだろう。

こうして俺達の今日の晩飯は無しになった．．．．．。

そしてストラウドは次の日になるまで意識が戻らなかった。

ちなみにストラウドには食べた時辺りの記憶が無いらしい。よほど凄く味がしたんだろうな．．．．．と思った。

第六話「これは一体!？」（後書き）

間違いの指摘、感想、アドバイスをお待ちしております！

あと、キャラ設定を追加したのでよかったですら見てください！

第七話「何故こうなる・・・?」(前書き)

またまた無理矢理な展開です。

ではどうぞ！

第七話「何故こうなる・・・？」

次の朝、ストラウドが目を覚ましたらすぐに別れの挨拶をして俺達は旅を再開した。

別れの挨拶をした時にカノンの様子がちょっとおかしかったけど気にしない。俺達に付いてきたそうな目をしていたが俺は気にしない。

これ以上メンバーが増えるのは勘弁だからな。
後、今俺達は森の中を進んでいるのだが・・・

ジィ〜

「・・・・・・・・・・。」

ジィ〜

「ア、アイデットさん・・・後ろから視線を感じるんですけど・・・。。。」

ジィ〜

「気にするな・・・気にしたら負けだ・・・。」

ジィ〜

何故後ろの方から視線を感じるのだろうか？

おかしいな、チラッと後ろを向いたら木に隠れながらこちらを見ているカノンを見つけたのだが・・・。

ジィ〜

バレていないつもりなのだろうか？
後ろの方から微かに、

「よし、私の尾行は完璧だ．．．．．。」

と聞こえてくる。いや、バレバレだからな？姿も見えているし．．．
．．．その尾行のやり方で完璧と思えるお前を尊敬するよ．．．。
ていうかカノンの着ている服が俺の着ているやつと全く一緒なんだ
が．．．．．気にしないでおう！！

ジィ〜

「アイデットさん、どうするんですか．．．．．？」

「無視に決まっているだろ、これ以上のお荷物はいらん．．．．．」
「。」

「お、俺もお荷物なんですか．．．。」

ストラウドが凄くがっかりしている。いや、そんなにがっかりされてもだな．．．．．。

ジィ〜

「ハア．．．．．。」

一体何なんだ？何故カノンは俺達に付いてきているんだ？誰か教えてくれないか．．．．．？

ボタンッ！

「きゃあ！？」

それにカノン何も無い所で転んだし．．．．。

「おいおい嬢ちゃん、中々可愛いじゃねえか？」

しかも変な怪しい奴等に絡まれてるし．．．．。

「すいませんアイデットさん！俺もう無視出来ません！！」

ストラウドはカノンを助けにいくし．．．．。

「止めろお！」

「何だデメエは！？」

「お前らみたいな奴等に名乗る名はない！！」

ストラウドはかつこつけだしたし．．．．。

「ちょっと待ってよ！」

「何だ？」

「何であんたなの！？」

「何だよ俺じゃいけないのかよ！？」

「こういう時は普通アイデットさんみたいな人が助けにくるもんでしょ！？あんたはお呼びじゃないのよ！！」

「ちょ、何だよその言い方！？それが助けに来た奴に対する言い方か！？」

ストラウドとカノンは喧嘩しだすし……。

「こいつら……ふざけやがって！！」

「ブツ殺してやる！！」変な怪しい奴等はキレだしたし……。

ガスッ！

「ちょ、不意打ちはいけないって！！」

「あんた弱すぎじゃない！やっぱりあんたじゃ駄目なのよ！！」

ストラウドはまたリンチされているし……。

そろそろ無視出来なくなってきたな……仕方がない、助けるか……。

「おいお前らそこら辺にしておけよ。」

俺がそう言いながら歩み寄るとストラウドとカノンは目をキラキラさせながら俺を見てくる。

そんな目で俺を見るんじゃない……。

「なんだテメエは．．．ってもしかして!？」

「お、おい!こいつまさか．．．．．!？」

お前達も世にも恐ろしい物を目の前にしたような顔をするのを止めるよ．．．．．。一体俺が何をしたって言うんだ．．．．．?」

「こ、こいつあの伝説の【黒き襲撃者】だぞ!！」

「な、なんで伝説の人物がここに居るんだよ!？」

「に、逃げろおおおおお!!!!!」

変な怪しい奴等は意味が分からん事を叫びながら走り去っていった。一体どんな伝説が語り継がれているんだよ!？なんでこんなに怖がられているの俺!？なあ誰か教えてくれよ!？

ガスガスガスガスッ!!

「痛い痛い!!な、なんで俺ばかりいいいい!？」

ハッ、俺は一体何を!？何で俺の拳に血がついているんだ?よく分からんが気にしないでおこっ!!

とりあえず何でカノンがここに居るかを聞かないとな。

「おいカノン、何でここに居る?」

「え〜と、それはですね．．．．．。」

こいつ何で顔を赤くしてモジモジしているんだ?なんだ、俺を狙っ

ているのか？

そしてカノンは上目遣いで俺を見ながら、

「お礼がしたいんです．．．．．。」

と言ってきた。お礼？なんだその事が、俺の事を狙っているのかと思っただじゃないか。

「礼ならしてもらった。だから気にしないでいいんだ。」

「でも私はしたいんです！私にとってアイデットさんは命の恩人なんですから！！」

カノンはもの凄い勢いで顔を近づけながら叫ぶ。
困ったな．．．、これ以上足手まといが増えるのは嫌だしな。
なにかが出来れば連れて行ってもいいんだが．．．。

「礼って一体何をするつもりなんだ？」

「ストラウドさんの傷を治します！私には回復の力があるんで！そうすればアイデットさんが彼をいくら痛めつけようが大丈夫ですから！」

なるほど、こいつ分かっているじゃないか。

よし、役に立ちそうだな！あつ、でも大切な事を忘れていたな。

「カノパ．．．父親はいいって言ったのか？」

これが俺にとって一番大切な事だ。あんな事があつたばかりだか

らな、カノパパとしてはしばらくは一緒に居たいだろう。
簡単に許可を出してくれるとは……

「簡単に許可を出してくれました！」

ええっ！？マジかよ！？なんで簡単に許可していいのかカノパパ！？

「あつ、お父さんがこれを渡してくれつて。」

なんだ手紙？一体何が書いてあるんだ？えつとなになに？

アイデットさんへ

いきなりカノンがすみませんでした。

カノンがどうしても着いていきたいと言いましてですね。

こちらとしてはやはり娘を旅には行かせたくないのですがカノンが、
「あの料理を毎日作って食べさせますよ？」と言ってくるものです
から……。

あの娘、自分の作る料理は強力な兵器だと理解したらしく脅しに使
うように……。

私もまだ死にたくないの……どうか助けてください！！
多分貴方に断われたら私の命が危ないんです！！どうかお助けを
！！

カノンの父より

脅しじゃねえか！！どつりで簡単に許可を得れた訳だ！カノン、な

んて恐ろしい奴なんだ！！

「という訳でよろしくお願いします、アイデットさん。」

「・・・・・・・・分かった・・・・・・・・。」

こうして俺はカノパパの命を守る為にカノンを連れていく事になった。

後、自分の楽しみの為に・・・・・・・・。。

第七話「何故こうなる・・・?」(後書き)

いや、個人的にはカノンはなかなかのお気に入りなんです。
だからどうしても仲間にしたくて・・・。

まあ、間違いの指摘、感想、アドバイスをお待ちしています！
後、キャラ設定を追加したのでぜひ見てください！！

第七・五話「アイデットが旅を再開した後」(前書き)

今回はカノン視点です。

やっぱり女の子視点は難しい。

それにカノンが少しヤンデレになっているような……気のせいですね！

ではどうぞー！

第七・五話「アイデットが旅を再開した後」

次の朝、ストラウドとかいう人が目を覚ましたらすぐにアイデットさん達は別れの挨拶をしては旅を再開してしまった。

本当は着いて行きたかったけどお父さんが許してくれないだろうし．．．。それにアイデットさんがいって言うてくれるかどうかも分からないし．．．いや、アイデットさんが伝説の通りの人ならいって言うてくれるはず！

だけとお父さんが．．．どうやって許可を貰おう．．．。

．．．
．．．
．．．
．．．
．．．

ピーーン！！

「そうだ！料理？を使つて交渉？すればいいんだ！！」

今日の朝お父さん私に料理を作らせなかったし、全力で阻止していたからこれを使えば絶対にいけるはず！そうと決まれば急がないと！！

家の二階に居た私は急いで一階でのもんびりしているお父さんの所に行つて、私はお父さんと交渉？をしました。

その時お父さんが、

「それは駄目だ！えっ．．．．．？許可を出さないと毎日朝昼晩の三食私が料理？を作るだって！？ひ、卑怯だぞ私はお前をそんな子に育てた覚えはないぞ！それにこれは交渉じゃなくって脅迫じ

や．．．．．ひい！！止めてくれ食べたくない！わ、分かった！許可を出す！！だから無理矢理それを食べさせようとするのは止めてくれええ！！」

とか言つてあつさり許可をくれました。優しいお父さんで本当によかったと思います。

あと、ついでにアイデットさんと全く一緒の服を用意して貰いました。だってアイデットさんと一緒なんて最高だと思いませんか？

お父さんの力はコピー能力なのですぐに用意出来て、サイズとかの調節はお父さんがしてくれました。

最初は文句を言っていたけど料理？を食べさせようとしたら文句も言わなくなつてすぐにしてくれましたよ。本当に優しいお父さんでよかったと思います。

こんな感じで旅の用意もお父さんにさせて私はアイデットさんを追いかける為に全力で走りました。

体力には余り自信がないけど何故か長い間全力で走れました。何でだろう？これが恋の力なのかな？キヤーー！恥ずかしい！！

そして暫く走るとやっとアイデットさんに追いつくことが出来ました。

私は木に隠れながらこっそりと着いていく事にしました。

一度こうやって隠れながらこっそり着いていきたくったんです。アサシンに憧れているので．．．．。まあそれは置いてですね、その後色々あつてアイデットさんにバレてしまいました．．．．。残念です．．．．。やっぱり私じゃアサシンみたいに出来ないのかな．．．．？

でもアイデットさんが着いていくのを許可してくれたので凄く嬉しいです！

許可を出してくれた時に私がお父さんから預かっていた手紙を読みながら軽く怯えていたけどなんでだろう？

まあ気にしないでおくことにします。着いていける事になったんだ

から小さい事は気にしません！！

こうして私はアイデットさんの旅に同行する事になりました何でた。邪魔者（ストラウドとかいう男の事です。私より年上らしいのです）がイライラします。第一ですね私より早くアイデットさんと旅をしている時点でイライラします。なんであんな奴が居るんでしょうか？あんな奴邪魔なだけです。アイデットさんが許可をしている理由も分かりません。消えればいいのに。消える消える消える消える消える消える！！）がいますけど．．．．．いつかこの邪魔者を排除？して二人きりで旅をしていつかは恋人になるんです！！キヤーー！！恥ずかしいいいいい！！！！

恥ずかしいけどそれが今の私の目標です！でもあの伝説が本当ならアイデットさんには．．．．．でも諦めません！！

絶対にアイデットさんを振り向かせて見せるんです！

私は一人心中でそう誓いました。

第七・五話「アイデットが旅を再開した後」(後書き)

間違いの指摘、感想、アドバイスをお待ちしています!!

もうドンドンしてきてください!!

第八話「移動手段？」（前書き）

え〜と、ではどうぞ!!

第八話「移動手段？」

カノンが仲間になった後、俺達三人は次の町へと向かっていた。そしてその道中、カノンがある事を聞いてきた。

「アイデットさん、一つ聞いていいですか？」

「何だ．．．？」

「何で歩いているんですか？色々な移動手段があるのに。」

「あつ．．．．．？」

カノンの言う通り、よく考えたら馬に乗っての移動とか色々あるじゃないか。なのに何故俺達は歩いているんだ？

そつか！ストラウドが色々な移動手段を教えなかったから俺達は歩いているんだ！ストラウド、本当に駄目な奴だな！

奴が気がついて俺に言わなかったのがいけないんだ！

「それはストラウドのせいだ。」

俺は嘘は言っていない。ストラウドが教えなかったから俺達はこうして歩いている訳だしな！

カノンは俺の言葉を聞いた瞬間、後ろに居たストラウドの方を向いて、

「天誅うう！！」

バキッ！

と言いながらストラウドの顔面に蹴りを入れた。

なかなかいい蹴りだったな。ストラウドが「へぎゅー！」とか叫びながら軽くぶっ飛んで木にめり込んだぞ。でも平気だろう、あいつギヤグ補正が付いていそうだし．．．．．すぐに立ち上がるだろう。

俺の予想通り、木にめり込んだストラウドはすぐに立ち上がった。そしてストラウドはカノンに向かって文句を言おうとしたが、

「ガハッ！お、お前いきなり何しやが．．．」

バコンッ！

「ガッ！？」

ストラウドに向かって走っていたカノンが飛び膝蹴りを食らわせた。しかも顎に．．．．．あれは酷い。下手すれば顎が砕けたかもしれない．．．．．まあストラウドにはギヤグ補正が付いているだろうから気絶する程度で済むだろう．．．．．ギヤグ補正は偉大だな。

また俺の予想通り、ストラウドは大の字になって倒れて気絶した。だがカノンが追い討ちをかけるように気絶したストラウドを何度も蹴っている。さすがに止めないといけないのか？見ているのは楽しいんだが、これ以上やられたら俺が苛められないからな。

俺はストラウドを蹴っているカノンに近づいて頭を撫でてやった。するとカノンはストラウドを蹴るのを止めた。

「そこまでだ、これ以上はするな。俺の楽しみがなくなるだろ？」

俺がそう言つとカノンは目をキラキラさせながら俺の顔を見てきた。それはもう凄い勢いで見てきた。そして一人ぶつぶつと何かを呟いているが俺は気にしない。

俺はボロボロの状態で気絶しているストラウドの襟首を掴んだ。そして俺は一人ぶつぶつと何かを呟いているカノンに、

「早く行くぞ。」

と言つてストラウドを引こずりながら歩き始めた。カノンは一人ぶつぶつと呟くのを止めて、俺の後ろを駆け足で着いてきた。

俺は歩きながら次の町に着いたらやる事を決めた。どんな移動手段があるかを確認してその中からいい移動手段を見つけたり、いい金稼ぎになる事を探したりする事を。

「ハア．．．この調子じゃ、目的地に着くのは当分先になるな．．．。」

そんな事を呟きながら次の町に向かう俺だった．．．。

それにしても早く起きないかなこいつ．．．。引こずるの面倒くさいんだが．．．。

別にいいか。このまま引こずっていたらストラウドの背中が大変な事になって．．．。ププッ！

起きた時のストラウドの反応が楽しみだ．．．。そうとなつたら思いきり引こずってやらないとな！

[illegible]

しばらくしてストラウドが目を覚ますと、背中が大変な事になって
 いている事に一瞬で気づき、「背中がああああ！！！！」と叫んで
 くれた。

やっぱりストライドは期待に答えてくれる奴だと笑いながら思った。

第八話「移動手段？」（後書き）

やっぱり上手く書けない・・・。

間違いの指摘、感想、アドバイスをお待ちしております！

ストラウドの日記 その1（前書き）

なんとなく書いてみました。

ではどうぞー！

ストラウドの日記 その1

ストラウドの日記

○月×日

最近何故かよく気絶している。

僕がアイデットさんに出会ってからよく気絶するようになったのは気のせいなのだろうか？

最初に気絶したのは確か．．．ハレーラの町を出てから数時間たった時だった気がする。

あの時は休憩しようとした時だった。何故かアイデットにお腹を踏まれて気絶したな．．．でもすぐに目が覚めた。

アイデットは何故か今度はさっきのより力を入れたやつを二発も放ってきた．．．グーパンチで。

そして二度目の気絶をした．．．。

しかも目が覚めたら何故か盗賊にボコボコにされていた。

今思えばあの時、アイデットさんニコニコしてたなあ．．．。

その後はアイデットに掴まれて盗賊のリーダーぽい奴に向かって投げられた。

そして激突してまた気絶してしまった。

あの人は以外と酷い人なのかもしれないと思った。

そのあと、目が覚めたら知らない廃墟に居た。

しかも右肩に酷い激痛がした。右を向くとアイデットさんが俺の右

肩を掴んでいた。

その時のアイデットさんの顔はもの凄く怖かった。泣きそうになったぐらいだった。実際泣いたけど、アイデットさんが俺の右肩を握り潰す勢いで掴んできたからね。

あれは今までで一番痛かったと言ってもいいぐらい痛かった。もう二度と食らいたくないとの心の底から思った。

その後はアイデットさんはカッコよかった。

さすがあの伝説の【黒き殲滅王】だと思った。

そのあと、カノンとかいう女の子の家に泊めてもらうことになった。カノンはなかなかの美少女だったのでテンションが上がった。

でもテンションが上がりすぎて、うるさくしたせいでまたアイデットさんの手によって気絶させられる。

後、記憶には無いけど何故か気絶したらしい。

理由はアイデットさんは、

「世の中には知らない方がいいこともあるだぞ？」

と言って全然教えてくれなかった。多分何か恐ろしい事が起きたのだと思う。なので深く考えないようにすることにした。

俺は今日だけでも五回も気絶してしまった。よく考えたらこの四回、アイデットさんの手によって気絶させられている事に気がついた。それとアイデットさんは俺を気絶させる時に毎回ニコニコしていた気がする。

やっぱりアイデットさんは酷い人なのかもしれない。

これからもちょうくちょうこの日記をつけようと思います。アイデットさんにバレないように・・・。アイデットさんにバレたらまた気絶させられると思うから・・・。

ストラウドの日記 その1（後書き）

このストラウドの日記はちよくちよく書いていきたいと思っています。

間違いの指摘、感想、アドバイスをお待ちしております！

お知らせ

お知らせです。

活動報告にも書いているんですが、書いている途中なんですがこの小説を書き直す事にしました？

見てくださっている人には申し訳ないのですが、自分的には今書いている小説は駄目すぎると思っています。

自分で読んでいてこれは駄目だと、これはもはや小説では無いんじゃないかと？

なので書き直します。

見てくれている人には申し訳ないと本当に思っています？

では書き直した後も読んでくれると嬉しいです。

まだ書き直した後の更新は未定ですがまたお会いしましょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1070u/>

テンペルス

2011年10月8日16時57分発行